処女作追懐談

夏目漱石

私の処女作――と言えば先ず『猫』だろうが、別に追懐する程のこともないようだ。ただ偶然ああいうものが出来たので、私はそういう時機に達して居たというまでである。

というのが、もともと私には何をしなければならぬということがなかった。勿論生きて居るから何かしなければならぬ。する以上は、自己の存在を確実にし、此処に個人があるということを他にも知らせねばならぬ位の了見は、常人と同じ様に持っていたかも知れぬ。けれども創作の方面で自己を発揮しようとは、創作をやる前迄も別段考えていなかった。

話が自分の経歴見たようなものになるが、丁度私が大学を出てから間もなくのこと、或日外山正一氏から一寸来いと言って来たので、行って見ると、教師をやって見てはどうかということである。私は別にやって見たいともやって見たくないとも思って居なかったが、そう言われて見ると、またやって見る気がないでもない。それで兎に角やって見ようと思ってそういうと、外山さんは私を嘉納さんのところへやった。嘉納さんは高等師範の校長である。其処へ行って先ず話を聴いて見ると、嘉納さんは非常に高いことを言う。教育の事業はどうとか、教育者はどうなければならないとか、

迚も我々にはやれそうにもない。今なら話を三分の一に聴いて仕事も三分の一位で済まして置くが、その時分は馬鹿正直だったので、そうは行かなかった。そこで迚も私には出来ませんと断ると、嘉納さんが旨い事をいう。あなたの辞退するのを見て益依頼し度くなったから、兎に角やれるだけやってくれとのことであった。そう言われて見ると、私の性質として又断り切れず、とうとう高等師範に勤めることになった。それが私のライフのスタートであった。

茲で一寸話が大戻りをするが、私も十五六歳の頃は、漢書や小説などを読んで文学というものを面白く感じ、

自分もやって見ようという気がしたので、それを亡(な)くなった兄に話して見ると、兄は文学は職業にゃならない、アッコンプリッシメントに過ぎないものだと云って、寧(むし)ろ私を叱った。然(しか)しよく考えて見るに、自分は何か趣味を持った職業に従事して見たい。それと同時にその仕事が何か世間に必要なものでなければならぬ。何故(なぜ)というのに、困ったことには自分はどうも変物である。当時変物の意義はよく知らなかった。然し変物を以て自(みずか)ら任じていたと見えて、迚(とて)も一々此方(こちら)から世の中に度を合せて行くことは出来ない。何か己(おのれ)を曲げずして趣味を持った、世の中に欠くべからざる仕

事がありそうなものだ。――と、その時分私の眼に映ったのは、今も駿河台(するがだい)に病院を持って居る佐々木博士の養父だとかいう、佐々木東洋という人だ。あの人は誰もよく知って居る変人だが、世間はあの人を必要として居る。而(しか)もあの人は己を曲ぐることなくして立派にやって行く。それから井上達也という眼科の医者が矢張(やはり)駿河台に居たが、その人も丁度(ちょうど)東洋さんのような変人で、而も世間から必要とせられて居た。そこで私は自分もどうかあんな風にえらくなってやって行きたいものと思ったのである。ところが私は医者は嫌(きら)いだ。どうか医者でなくて何か好い仕事がありそうなも

のと考えて日を送って居るうちに、ふと建築のことに思い当った。建築ならば衣食住の一つで世の中になくて叶わぬのみか、同時に立派な美術である。趣味があると共に必要なものである。で、私はいよいよそれにしようと決めた。

ところが丁度その時分（高等学校）の同級生に、米山保三郎という友人が居た。それこそ真性変物で、常に宇宙がどうの、人生がどうのと、大きなことばかり言って居る。ある日此男が訪ねて来て、例の如く色々哲学者の名前を聞かされた揚句の果に君は何になると尋ねるから、実はこうこうだと話すと、彼は一も二も

なくそれを却けてしまった。其時かれは日本でどんなに腕を揮ったって、セント・ポールズの大寺院のような建築を天下後世に残すことは出来ないじゃないかとか何とか言って、盛んなる大議論を吐いた。そしてそれよりもまだ文学の方が生命があると言った。元来自分の考は此男の説よりも、ずっと実際的である。食べるということを基点として出立した考である。所が米山の説を聞いて見ると、何だか空々漠々とはしているが、大きい事は大きいに違ない。衣食問題などは丸で眼中に置いていない。自分はこれに敬服した。そう言われて見ると成程又そうでもあると、其晩即席に自

説を撤回して、又文学者になる事に一決した。随分呑気なものである。

然し漢文科や国文科の方はやりたくない。そこで愈英文科を志望学科と定めた。

然し其時分の志望は実に茫漠極まったもので、ただ英語英文に通達して、外国語でえらい文学上の述作をやって、西洋人を驚かせようという希望を抱いていた。所が愈大学へ這入って三年を過して居るうちに、段々其希望があやしくなって来て、卒業したときには、是でも学士かと思う様な馬鹿が出来上った。それでも点数がよかったので、人は存外信用してくれた。自分も

世間へ対しては多少得意であった。ただ自分が自分に対すると甚(はなは)だ気の毒であった。そのうち愚図々々(ぐずぐず)しているうちに、この己れに対する気の毒が凝結し始めて、体(てい)のいい往生(レシグネーション)となった。わるく云えば立ち腐れを甘んずる様になった。其癖(そのくせ)世間へ対しては甚(はなは)だ気燄(きえん)が高い。何の高山の林公抔(など)と思っていた。

その中、洋行しないかということだったので、自分なんぞよりももっとどうかした人があるだろうから、そんな人を遣(や)ったらよかろうと言うと、まアそんなに言わなくても行って見たら可いだろうとのことだったので、そんなら行って見ても可いと思って行った。然

し留学中に段々文学がいやになった。西洋の詩などのあるものをよむと、全く感じない。それを無理に嬉(うれ)しがるのは、何だかありもしない翅(つばさ)を生(は)やして飛んでる人のような、金がないのにあるような顔して歩いて居る人のような気がしてならなかった。所へ池田菊苗君が独乙(ドイツ)から来て、自分の下宿へ留った。池田君は理学者だけれども、話して見ると偉い哲学者であったには驚いた。大分議論をやって大分やられた事を今に記憶している。倫敦(ロンドン)で池田君に逢(あ)ったのは、自分には大変な利益であった。御蔭(おかげ)で幽霊の様な文学をやめて、もっと組織だったどっしりした研究をやろうと思い始

めた。それから其方針で少しやって、全部の計画は日本でやり上げる積(つもり)で西洋から帰って来ると、大学に教えてはどうかということだったので、そんならそうしようと言って大学に出ることになった。(是(これ)も今云った自分の研究にはならないから、最初は断ったのである。)

さて正岡子規君とは元からの友人であったので、私が倫敦(ロンドン)に居る時、正岡に下宿で閉口した模様を手紙にかいて送ると、正岡はそれを『ホトトギス』に載(の)せた。『ホトトギス』とは元から関係があったが、それが近因で、私が日本に帰った時(正岡はもう死んで居た)

編輯者の虚子から何か書いて呉れないかと嘱まれたので、始めて『吾輩は猫である』というのを書いた。所が虚子がそれを読んで、これは不可ませんと云う。訳を聞いて見ると段々ある。今は丸で忘れて仕舞ったが、兎に角尤もだと思って書き直した。

今度は虚子が大いに賞めてそれを『ホトトギス』に載せたが、実はそれ一回きりのつもりだったのだ。ところが虚子が面白いから続きを書けというので、だんだん書いて居るうちにあんなに長くなって了った。というような訳だから、私はただ偶然そんなものを書いたというだけで、別に当時の文壇に対してどうこうと

いう考も何もなかった。ただ書きたいから書き、作りたいから作ったまでで、つまり言えば、私がああいう時機に達して居たのである。もっとも書き初めた時と、終る時分とは余程（よほど）考が違って居た。文体なども人を真似（まね）るのがいやだったから、あんな風にやって見たに過ぎない。

　何しろそんな風で今日迄やって来たのだが、以上を綜合（そうごう）して考えると、私は何事に対しても積極的でないから、考えて自分でも驚ろいた。文科に入ったのも友人のすすめだし、教師になったのも人がそう言って呉（く）れたからだし、洋行したのも、帰って来て大学に勤め

たのも、『朝日新聞』に入ったのも、小説を書いたのも、皆そうだ。だから私という者は、一方から言えば、他（ひと）が造って呉れたようなものである。

底本：「筑摩全集類聚版　夏目漱石全集　10」筑摩書房
１９７２（昭和47）年１月10日第１刷発行
初出：「文章世界」
１９０８（明治41）年９月15日
※底本は、「談話」の項におさめた本作品の表題に、かぎ括弧を付けて示している。
入力：Nana ohbe
校正：米田進
２００２年４月27日作成
２００３年５月11日修正
青空文庫作成ファイル：